

日本の竹工は、茶道と深い関わりを持っています。江戸時代末から明治期にかけて流行した煎茶では竹工品が広く用いられ、中国からの渡来品である細かい編みの唐物が大変好まれて、唐物を写した作品が数多く制作されました。大正十年代から昭和初期にかけて各地より献上され、当館に伝わる花籠の数々は、その伝統的な技を伝える作品群で

す。一方、そうした唐物の伝統が色濃く残る時代に、作家として自己の表現を追求した飯塚琅玕斎の活躍によって、竹工の近代化が進められ、工芸界に竹工芸の基盤が築かれました。また、その次の世代で、竹芸の分野で初めて重要無形文化財の認定を受けた生野祥雲斎らの作品もここで紹介します。



11 — 東京  
花籠 飯塚琅玕斎  
大正11年(1922)頃







- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に<sup>1</sup>出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

工芸風土記 式―木・竹・漆工の世界

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 31

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十五年七月五日発行

© 2003, Museum of the Imperial Collections